〈孤島-都市〉としての南大東島

研究代表者：加藤政洋（立命館大学文学部・教　授）
共同研究者：河角直美（立命館大学文学部・准教授）

Ⅰ　はじめに

(1) 研究の目的

本研究は、太平洋に浮かぶ絶海の孤島というべき南大東島が、さとうきび農業を基盤とする製糖業のモノカルチャー経済を通じて都市化する様態を、歴史地理学的な観点から明らかにするものである。

沖縄島から東方約 400 ㎞の太平洋に位置する南大東島は、周囲 21km・面積 31 ㎢（人口約 1,300 人）を有する大東諸島最大の島であり、明治 33（1900）年に開拓がはじまって以来、さとうきび栽培に特化した農業と製糖という典型的なモノカルチャー経済を基盤として発展してきた。南大東島に関して重要なのは、①さとうきびの刈り入れと製糖は主に 1～3 月に限られるため、労働の季節性が顕著であること、②島の土地を製糖会社がかつて独占所有していたことから、移住した労働者は小作として農業に携わるほかはなかった、という 2 点である。戦後の米軍統治下においても産業構造に大きな変化はなく、移住労働者と季節労働者に依存したモノカルチャー経済が一段と発展したのだった。一時的ではあったが、台湾・韓国から季節労働者が移入していたことも忘れてはなるまい。

かつて柳田国男は、沖縄の「孤島苦」（人口流出・差別・生活苦）を指摘したが[1)]、南大東島に関して興味が持たれるのは、琉球列島の離島のみならず、沖縄本島の周縁部、さらには奄美諸島からも労働者を受け入れたことで〈移民島〉の様相を呈するとともに、中心部には旅館や銭湯はもちろん、映画館や料亭などの遊興施設も集積するなど、同規模の島では類を見ない市街地が形成されて、島それ自体がまるで都市のような空間と化したことである。このように都市化する離島の歴史地理を、移民（移住労働者）の人口動態ならびに季節労働者の経年変化、そして中心市街地「在所」の空間的特色という二つの観点から明らかにする。

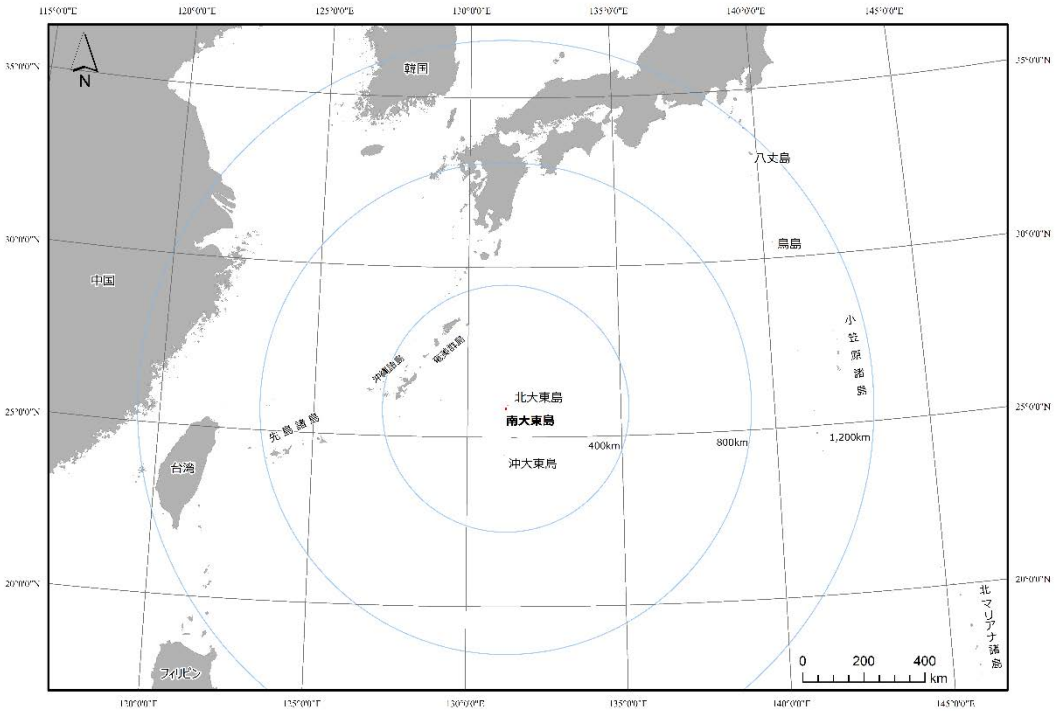
(2) 対象地域の概観

大東諸島は太平洋の深海に屹立した「三ツ星の孤島」、すなわち南北の大東島（ボロヂノ）と沖大東（ラサ）によって構成されている。沖縄では古くから「ウフ（＝大）アガリ（＝東）ジマ」と口承されており、島の存在は認識されていたようなのだが、明治後期までは無人島であった。この無人島開拓に携わったのが、アホウドリを追って探検隊を派遣していた、八丈島出身の玉置半右衛門（たまおき・はんえ

もん、1838 -1910 年）という人物である。高値で取り引きされたアホウドリの羽毛を追い求めて〈帝国〉が南進するさまを、平岡昭利は『アホウドリと「帝国」日本の拡大』のなかで明らかにした[2)]。

琉球列島がユーラシアプレート上にある一方、フィリピン海プレート内に位置する断崖絶壁の大東諸島は、いずれも隆起環礁として知られている[3)]。3 つの島は赤道付近で火山島として生まれ、プレート運動にともない北西方向へと移動した。ホットスポットから離れたことで火山島ではなくなるとともに、地盤の沈降が進んだ結果、島の周囲に形成されたサンゴ礁は裾礁から堡礁へと移行し、最終的に環礁となった。沈降が進行すれば島もろとも環礁も海面下へ没したはずなのだが、約 100 万年前からは隆起に転じ、世界的にも珍しい隆起環礁が形成されたのである。離水と沈水が繰り返されるなかで海岸は海蝕され、容易に上陸することのできない急崖となった。

絶壁で囲まれた南大東の島内は、海岸線とほぼ並行する環状の丘陵地帯、そしてその内側の盆地からなる。丘陵地帯に発達するリッジ（尾根）は慣習的に「幕（ばく）」と称されており、外縁を「外幕（そとばく）」、内縁を「内幕（うちばく）」と呼び分けている。また、海岸線に沿った海蝕崖と外幕とのあいだで土壌に覆われた低地帯は「幕外」、さらに外幕と内幕に挟まれた環状の一帯は「幕上（ばくうえ）」と、ここでも地形景観に応じた呼び分けがなされている。



第 1 図 南大東島を中心とした正距方位図

環状の内幕を境に中央部へと向かって緩やかな傾斜となる。盆地のところどころに「丸山」と呼ばれる小丘陵が分布し、盆地の底部には環礁の名残であるラグーン（湖沼）もみられる。ドリーネ（窪地）や鍾乳洞も発達しているほか、表層の土壌はテラロッサであり、石灰岩地域によくみられる特徴を有していると言えよう。

島の気候は亜熱帯海洋性気候に属しており、夏と冬で季節風の入れ替わりが顕著となるが、海に囲まれているため海洋の影響を受けやすく、年間を通して温暖である。降水量は夏季に多いものの、空梅雨や台風が接近しない年は、干ばつに見舞われやすい。

第1表 人口の経年変化

年	月	人口
1900	1	23
1901	1	37
1903	12	290
1905	−	422
1921	−	4,047
1926	5	4,015
1943	2	3,023
1946	3	1,464
1950	12	1,604
1955	12	3,083
1960	12	3,404
1965	10	2,934
1970	10	2,252
1972	12	2,134
1975	3	1,775
1976	7	1,736
1983	5	1,626
1989	9	1,472
1991	9	1,441
1993	10	1,397
1995	4	1,430
1996	4	1,419
1996	8	1,444
1997	8	1,455

諸種の資料により作成。

さて、本州島からみれば大東諸島は列島から隔絶した太平洋上に位置している。だが、大東諸島を中心とする地図を作成してみるとどうであろうか（第 1 図）。玉置半右衛門に率いられた開拓者たちの出身地・八丈島は、1,200 ㎞圏内におさまっている。鳥島や小笠原諸島といった太平洋上の島々、さらには台湾、上海の位置する長江下流部、そして朝鮮半島南部などもこの範囲にあり、東京よりも近い。島に生き、島から島へと旅した玉置の目に太平洋の島々はどのように映っていたのだろうか。本州島からの眺めとはまったく違う見え方をしていたことは疑い得ない。

明治中期に正式に日本の領土となった大東諸島のうち、玉置が南大東に入植をはじめるのは、明治 33（1900）年のことだ。南大東島にはアホウドリがおらず、燐鉱もなかったため、彼はさとうきび栽培と製糖を企図する。以下、南大東の 20 世紀史を概観しておこう。

第 1 表は、人口の経年変化を示したものである。八丈島から 1,000 ㎞を超える海路をはるばるやってきて、断崖絶壁の無人島に最初に登り立ったのは、23 名にすぎない。しかしながら、3 年後の人口は 10 倍以上の 290 人となり、20 年後の大正 10（1921）年には 4,000 人を超える。この前後が島の人口史におけるピークであったとみられる。

製糖業は、入植以来、玉置商会が担い機械化を進め増産に努めていたものの、大正 5（1916）年に東洋製糖への売却が仮契約された。東洋製糖は南北大東島の製糖業のみならず土地までも手中に収めたことから、戦後、土地所有権をめぐる問題が米

軍統治下で深刻化することとなる。その後、昭和 2 年の金融恐慌に際しては、東洋製糖が大日本製糖に吸収合併される。

太平洋戦争時には人口が激減し、終戦後は一時的に 3,000 人台まで回復するものの、1970 年代以降になると減少の一途をたどる。東洋精糖を引き継いだ大日本製糖は、戦時中の執拗な爆撃によって工場や関連施設の壊滅的な打撃を受け、戦後、軍政府に財産を接収されて全社員が南北大東島から撤退するところとなった[4)]。

南北大東島の製糖業を復興させたのは、宮城仁四郎率いる大東糖業である。くわえて、地元農家の土地所有権が 1964 年に認定されたことで、現在にいたるさとうきび農業と製糖業からなるモノカルチャー経済の基盤が確立されたのだった。

1960 年代以降の農家数・耕地面積・生産高・産糖量の推移を 10 年きざみでみると（第 2 表）、生産高は年によって差が大きく、それにあわせて産糖量も変動している。農家数が減少傾向にあるのに対して、耕地面積は微増と微減を繰り返しながら 120,000a 前後で維持されている。農業の集約化が進んだものといえるだろう。

第 2 表　さとうきび農家数・面積・生産高・産糖量の経年変化

年期	戸数	面積	生産高	産糖量
		(a)	(kg)	(kg)
1965-66	313	144,419	75,201,351	8,627,430
1975-76	256	119,041	102,938,831	12,666,835
1985-86	249	117,818	70,090,700	8,229,845
1995-96	255	129,300	57,461,864	7,253,920

出所：南大東村『村勢要覧　昭和62年4月』『村勢要覧　平成10年9月』

Ⅱ　植民地プランテーション

(1) 島への入植

玉置半右衛門が開墾の許可を得たのは、明治 32（1899）年である[5)]。彼はその前年に南大東島を自ら発見しており、上陸はしなかったものの、島の概況については把握していた。

開墾（貸下げ）の許可を受けて、地元八丈島で出稼ぎ人を募集したところ、八丈島から 15 名、鳥島から 4 名、東京から 5 名の計 24 名の応募があった。医師や鍛冶師も含む一行は帆船回洋丸で同年 11 月に八丈島を出港し、12 月に那覇に寄港する。下船した者、新たにくわわった者などがあるなかで、乗員 23 名が南大東島に上陸をはたしたのは、明治 33 年 1 月 23 日のことであった。棕櫚やビロウ樹な

どの原生植物に覆われた土地は、移住者の目にどのように映ったのであろうか。

開拓者たちは、すぐさま宿舎の建築に着手し、食料を得るべく蔬菜・穀類の播種をはじめた。数多く分布する池沼で飲料水を確保できたことは、開拓の大きな一歩であったとされている。

共同開墾のもと、明治 34（1901）年 1 月にはさとうきびの植え付けを終えて、翌明治 35 年には製糖もはじまる。同年 5 月、玉置は製糖機械と技師らを連れて来島するが、このとき沖縄の労働者 11 名も移住させた。これが沖縄からの労働者移入の最初となった[6)]。さらに 12 月にも製糖技術者 18 名を同伴して訪れたことで、上陸からわずか 2 年にして機械による製糖が開始されたのである。この間に八丈島からの移住者が増加した結果、明治 36 年 6 月の人口は 220 人、耕地面積は約 105 町（約 10,413a）、産糖高は 7,000 貫（26,250kg）となった。

玉置時代に入植した開拓者への貴重なインタヴュー記事があるので、ここで取り上げてみたい。最初の一人は「開拓期にジャングルを開き、キビ作に専念、島とともに六〇年をすごしてきた」という N 氏（取材当時新東在住、78 歳）である[7)]。N 氏は玉置の上陸から 10 年後の明治 42 年 12 月 23 日に来島した。当時 18 歳で、明治 40 年に移住していた義父と姉をたよってきたのだという。

記者に移住の理由を問われた N 氏は、次のように答える。

> 身よりの者が先に島に来ていたこと、それに玉置翁は政府から三〇年の契約で島を借り受けていましたが、三〇年経ったら小作人に土地をやるとの条件があったので、希望をいだいて新天地開拓にやって来ました。それで汗水流して開墾、農作にはげみました。一人当り五～六町歩の土地を割当てられましたが、信用のある者は大将（玉置翁の長男鍋太郎さん）に願い出てさらに割当てをうけることもできました。
>
> ところが、大正時代に入って玉置の権利は東洋製糖に買収されるようになり、われわれが自力で開墾した土地は不合理にも売られてしまった。

この語りに示されるように、小作農から自作農への転換が約束されていたものの、土地（島そのもの）が企業に払い下げられてしまったことから、開拓者の将来的な所有権が「不合理にも」はく奪されてしまったのである。

また、N 氏が入植した当時の生活は次のように語られる。

> 池之沢と南区、北区は開拓されていました。新東区に土地を割当てられ、ジャングルを伐採して開墾、やっとの思いで四十三年の春、キビを植えつけました。家はビロー樹で柱や骨組みをして、屋根やカベはシュロの葉でおおい雨露をしのぐ程度の掘立て小屋でした。南洋土人（マ・マ）の小屋と同じです。
>
> ジャングル開きも大変でしたよ。一本のガジマルを三人が三日もかかって切り倒したものです。三百坪もの土地をおおっている大木があり、倒す前に逃げ場を作っ

たものです。土地は肥えていて株の間に作物を植えましたが、害虫もいなかったのでサツマイモ、野菜類がよく出来ました。

池之澤・南・北、そしておそらくは旧東の 4 つの集落では、開拓が済んでいた。明治末年の新東では、密林の伐採にはじまる開拓がまだつづいていたようだ。家屋建設の木材も、伐採された木々から調達されていた。家の周囲では蔬菜栽培もなされていたようである。

次いで、玉置半右衛門に勧誘されて明治 41 年、17 歳の時に移住し、「丸太小屋に寝起きして文字通り牛馬のように働きづくめだった」という S 氏（取材当時 67 歳）の語りに耳を傾けてみたい[8]。彼は「当時の島の様子」を聞かれて次のように答えた。

それはおどろくほどうっそうとした密林で、うっかり入り込むと迷って元の場所には帰れずよくカンカンをたたいて人捜しをしたものでしたよ。また木を一日に二百何十本か伐り倒したこともあります。それは皆〝ショイ子〟で一つ一つ運んだもので、牛馬もない、機械もない当時のこととてそれ以外に方法はなかったのです。

S 氏は「開拓当時の食生活は主食はやはり米でしたが島には先覚者たちが移入した山羊やニワトリがものすごく繁殖していたし、クバの木にはアンマコ（ヤシガニ）が二、三十匹もぶらさがっていました」とも述べ、食に不自由しなかったことも思い出語りしていた。

（2）志賀重昂のみた南大東島

琉球沖縄島の東二百浬の海上、北緯二十六度、東経百三十一度の辺まで来ると、軍艦松江丸の左舷に当り、薄墨にて筆太々と書きたる『一』の字如き島が現はれた。此の『一』の字は余程名筆にて書きたる様に見ゆる、即ち先きがずッと細長く端近が少し高くなつて居る、此の高いのが南大東島即ち南（サウス）ボロヂノ島の最高点海抜百四十一呎の処である。[9]

隆起環礁の南大東島遠景を漢数字の「一」に喩えてみせたのは、明治の地理学者・志賀重昂（しが・しげたか 1863-1927）である。明治 39 年（1906）1 月、軍艦松江丸で視察した際の様子を、彼は日記に克明に書き留めていた。

森を綴る羊歯樹の葉を掻き別け［掻き別け］十余町ほど行くと、樹を処々に切り倒して土地を開墾し、甘藷を栽えたる畠が見え出した。更に進むと、樹は愈々切り倒され、土地は益々開け、甘蔗の畠が一面に見え、此の前後より道路は幅三間となり、人家も処々に見え、それより軽便鉄道の軌道の辺を横ぎり、木材倉庫に

てタビラ（堅緻なる木材）を鋸し居れる処を過ぎ、共同浴場の海を経て、島の中央に出でた。島の中央より北に行くこと四五町にして、更に又た共同浴場がある。[10)]

ビロウ樹の森を抜けていくと、開拓された一帯に到達する。さとうきび畑のなかに道路が通じ、家屋も散見された。刈り取ったさとうきびや生産した黒糖を輸送する「軽便鉄道の軌道」までもが、すでに敷設されている。志賀の目を引いたのは、共同浴場の存在である。浴場は島内に三か所あり（これらとは別に開墾事務所にも併設）、いずれも無料であった。

「島の中央」には、「開墾事務所」が置かれていた。おそらくは後述する池之澤（池ノ澤）、のちの在所に立地していたものと思われる。一行が泊まった「開墾事務所」の部屋は「離れ座敷」で、「此の座敷は太やかなる竹を欄干とし、羊歯樹の幹を赤き内皮の儘柱とし、タビラ樹の光滑せるものを板とし、風流に構へたることゝて、涼しさ云はんかたなく、心気も頓に爽となりた」るほどに快適であった。

食堂に会しての晩餐は、「熱帯果物の餌に飽きて肥へ太りたる鶏肉のフライあり、野菜類の甘煮あり、中央に一個の鍋をかけて鶏肉の煎焼あり」という豪華な食卓で、「エビス麦酒と菊正宗」までもが供されたことに、一同は感嘆する。

志賀が訪れた当時、開拓移民は 93 戸 422 名であった。移住者に対しては、耕作地と宅地が割り当てられ、家屋も無償で提供されていたというのだが、先ほどの N 氏や S 氏の語りをふまえるならば、伐採した木材をもちいて自前で建てる丸太小屋というのが実情であったろう。移入後の 4 年間は、渡航費、生活費、農具代ならびに賃金の半額が免除され、残額は向こう 5 年間無利息で償却し、売上純益は配当されていたという。「東京との交通は、風帆船一艘を以て当て、一年十二回航行し」ていた。

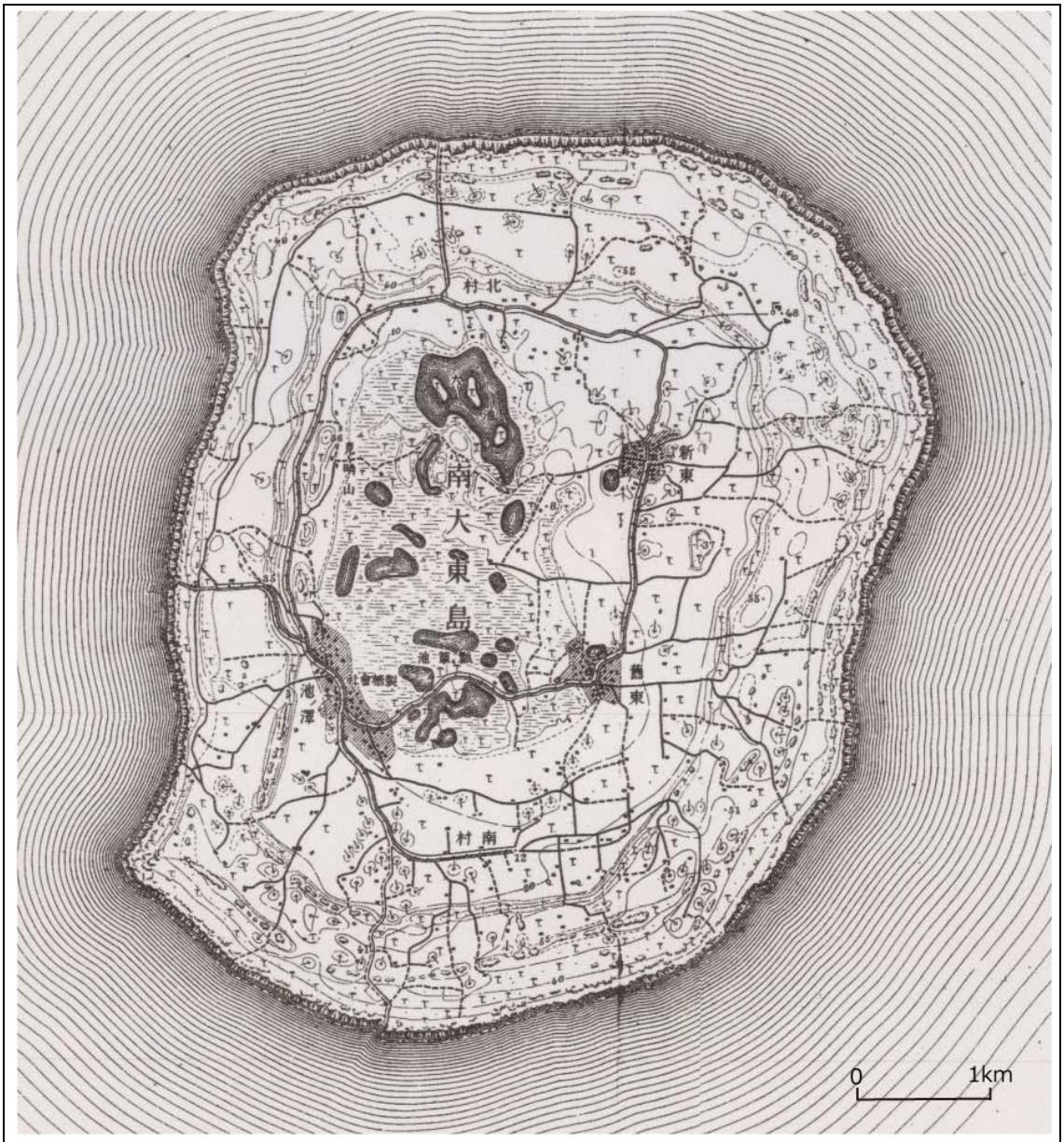
建造物としては、事務所 2、製糖所 11、倉庫 4、船小屋 3、浴場 4、学校 1、鍛冶小屋 1、賄所 12、井戸 18 などが数え上げられている。11 か所に分散する製糖所の存在は、開拓地区のまとまりごとに製糖されていたことを示している。

(3) 大正 6（1917 年）の景観

大正 6 年測量の 5 万分の 1 地形図をみると（第 2 図）、島は棕櫚（シュロ）科樹林でおおわれていたことがわかる。明治後期にはじまる開拓から 20 年近く経過しているものの、原生林がいまだ残存していたわけだ。島の中央部は池沼と湿地帯であり、いたるところに凹地（凹陥地）がみられる。ドリーネであろう。また、「丸山」と称された小さな高まりもみられるが、これらはのちに掘り崩され、（おそらくその土砂をもって）凹地が埋められていくことになる。

この地形図では現在の地図記号と異なるため（「畑」は空白）、さとうきび畑を判別することは難しい。棕櫚林の間を縫うように拓かれた土地で栽培されていたと

思われる。なお、志賀は「米作地五十九町」と記しているのだが、この地形図で確認することはできない。



第 2 図 大正 6（1915）年の南大東島

出典：五万分一地形図「南大東島」、大正六年測図、大正八年発行、大日本帝国筑紫測量部

「池ノ澤」には、「製糖曾社」をはじめ学校や内国公署も立地していることから、中心集落が形成されていたものと思われる。「内国公署」は役場に相当するのであろうが、玉置ないし東洋製糖の支配下でどのような位置づけであったのかはさだかでない。

他方、島の東部には「舊東」と「新東」という二つの集村がある。名称は、集落形成の新旧を表わしているのだろう。すでにみたとおり、明治 42 年、N 氏は新東に入植し、開拓に携わった。これら集村のほかに、北部では「北村」、南部では「南

村」という村名が記載されているものの、集村の形態をなしていない。家屋が個々に散らばって立地しているところをみると、ある種の散居村的な形態を呈していたようだ。

4つの集落を通る環状道路が整備されており、これを幹線として大小の道路が分岐していた。その一部は海岸付近まで達している。さとうきびの運搬などに用いられた特種鉄道は、中心地の池ノ沢から、北村方面、同じく池沼を抜けて旧東を経由して新東方面、そして南村方面へとそれぞれ延伸していた。島の西側、現在の西港の位置するところには浮標がある。特種鉄道もそこまで延びており、物資の輸送が可能となっていた。

以上が大正 6 年の地形図から読み取ることのできる景観である。企業進出前夜の原風景と言えるだろう。

Ⅲ　東洋製糖の生産体制と労働力

(1) 労働者の階梯と移動性

神戸の鈴木商店の斡旋によって、玉置商会から大東島の経営権（のちに土地所有権）を引き継いだのが、東洋製糖である[11)]。大正 5（1916）年 9 月に南北大東島を取得した同社は、すぐさま 500 トンもの原料を処理することのできる分蜜糖工場の建設ならびに鉄道の敷設に着手する。

「鈴木商店が台湾に着眼して砂糖、樟脳等に手を出したるは、遠く明治三十五年に在り、爾来同店は台湾糖界には牢固たる精力を扶植し、東洋製糖株式会社は同店によりて創立せられ、その系統にて支配せられたり」というように[12)]、明治 40（1907）年創立の東洋製糖は、下に列挙するように、台湾において製糖事業の経験を十分に積んでいた[13)]。

明治 41 年	南靖製糖所（嘉義）1,000 トン	操業開始
明治 44 年	鳥樹林製糖所（嘉義）750 トン	操業開始
大正 3 年	斗六製糖所 500 トン	合併
大正 4 年	北港製糖所 1,500 トン	合併
大正 5 年	台湾赤糖会社	買収

植民地経営の実験・経験にもとづく建造環境の生産とならんで重要なのが、強制的な営農慣習の改変、すなわち「小作経営組織」の制度化である（大正 6 年 6 月 15 日）。大正 6 年 11 月には島そのものが政府からいったん玉置商会に払い下げられ、翌年には東洋製糖へと転売されていることから、地主-小作関係は（農家からすれば）不可抗力的に構造化されるところとなった。小作経営の組織化が意味する

ところは自家製糖を認めない、すなわちすべての原料を製糖工場へ納めることにほかならず、処理能力の高い工場を操業して収益を得るための手段だったのである。

くわえて必要となるのが、原料となるさとうきび 500 トン分を収穫できるだけの耕地面積と肥育労働力、さらには刈り取る労働力であった。「本島開拓事業の進展に伴ひ沖縄本島より渡島するもの、年年増加し、大正五年九月玉置商会より本島経営の事業を当社に引継ぐに際し、残留せるもの五百八十九名となつて居た」(179 頁）というのだが、大正 10（1921）年を前後する時期に島内人口のピークがあるのは（第 1 表)、東洋製糖による生産体制の強化に符合するものとみてよい。

では、東洋製糖は自社工場の製糖に必要な労働力をどのように確保していたのか。耕地面積は拡大したものの、それに見合うだけの労働力をまかなうことができず、当初から製糖期の「原料採集」に際しては労働力不足が顕著であった。そのため同社は毎年、沖縄島から 500～1,000 名程度の労働者を移入させている(第 3 表)。

第3表 労働力の推移

年期	耕作者	移入労働者の動向			労働者の配置	
		移入	帰還	北渡島	村	会社
1916	-	589	-	-	-	-
1917	153	547	276	29	-	-
1918	165	420	515	251	-	-
1919	200	1,491	320	202	-	-
1920	237	650	434	54	-	-
1921	244	350	506	29	736	316
1922	295	268	395	8	732	313
1923	274	752	712	15	867	372
1924	273	539	386	8	765	327
1925	268	984	706	21	844	362
1926	256	767	680	2	818	343

＊1919年の移入労働者には「台湾苦力」260名が含まれる。

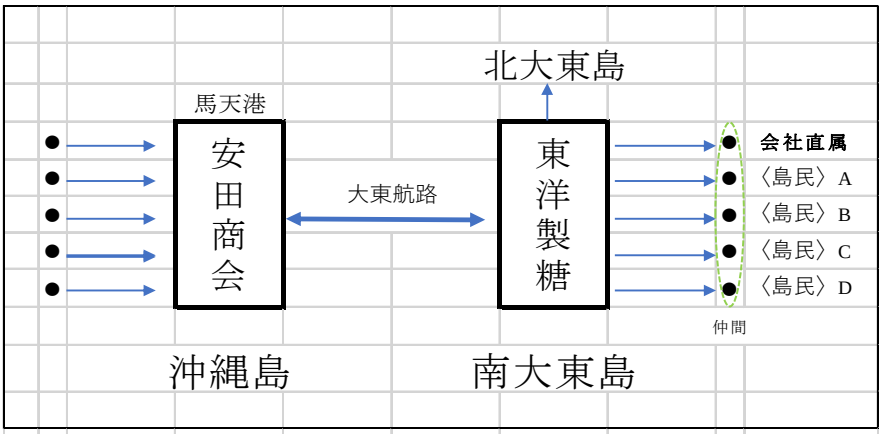
『大東島誌』（181-183頁）より作成。

大正 7（1918）年、第一次世界大戦の影響から労働力の確保が難しくなり、大正 8 年には「台湾苦力」260 名あまりを移入するも、「素質不良の為め」わずか一年で帰還させる結果となった。さらに、奄美群島からも「労働者を移入したることあるも、之れ又成績振はず僅かに数名のものを残して皆引揚げた」という（179-180 頁)。

その後は本州における労働市場の規模が縮小した一方、南洋諸島への進出（移民）もさかんとなり賃金も上昇したため、南大東への「出稼を希望する者」が続出した。

後述するように、会社の直属で、あるいは農家のもとで下働きする労働者は、い

ずれも「仲間」と呼ばれていた。仲間の募集業務を一手に担ったのが、佐敷村字津波古に立地した安田商会である（第 3 図）。津波古は馬天港を擁する南部東海岸の港町で、大東航路の起点となっていた。



第3図 大正期における労働力の移動と配置

ここで、「出稼ぎ」経験者の語りにも耳をかたむけてみよう。

私は明治二四年（一八九一年）生まれですが、大正六年（一九一七年）二六才のとき、大東島へ出稼ぎに行きました。大東島には、製糖工場があって、当時沖縄からの出稼ぎ者が三〇〇人位勤めていました。

字出身者は、字内のナハンヤーの上間金太郎さん等が労務者の募集をしていたので、一時は五～六〇人位働いていました。

私は島の製糖会社に勤めることになり、当初見習いから初め、やがて本職工、そして分離室の責任者になり、二五年勤務の後昭和十七年に郷里に帰って来ました。

当時大東島へ渡航するには、名護－那覇間は船便、那覇－与那原間は軽便鉄道、馬天まで歩いてそこから半（ママ）帆船を利用しなければならなかった。[14)]

辺野古から大東島への出稼ぎは、大正五年嘉陽宗康（松嘉陽）が東洋製糖会社募集で妻ウシ（東門出嫁）と共に、北大東島へ渡島したのに始まる。…〔略〕…

南大東出稼ぎが大正七年～十三年頃に集中した背景には、同七年一月部落内で発生した大火災によって二十七戸が焼失、被災に遇った家族が現金収入を求めて渡島した事や同十一年、字が請け負いした二見－世富慶間の郡道工事の失敗で…〔略〕…出稼ぎにたよらざるを得なくなった当時の経済状況に起因したといわれ、両島にはシマから十家族に十名余の単身者が渡島した。[15)]

いずれも沖縄島北部からの「出稼ぎ」である。募集は「沖縄の農閑期及各方面の募集閑散なる時期」の夏季に実施していたという。市町村史や字誌に収録された語りによると、上記のように各地に周旋する人物がいたようで、ひとつの字（シマ）

から集団的に出稼ぎするケースもみられた。出稼ぎ経験者などが、安田商会ないし東洋製糖とのパイプ役になっていたのかもしれない。

第 3 表からは、東洋製糖の経営下、毎年数百人規模で労働力移動の起こっていたことがわかる。しかしながら、「製糖期中の労力は大略一千三百名、非製糖期中の労力は八百名前後なれ共、実際本島に於て必要とする処は製糖期中は約一千五百名、非製糖期中に於ては九百名なるが故に、目下幾分不足の傾向を呈」し、「毎年の募集成績は予定人員の二割乃至三割不足する状態であ」った（188 頁）。その背景には、「現時沖縄本島に於ける労力は内地各都会地及南洋サイパン又は比律賓其他海外に出稼するもの多く、日に月に募集競争激烈となりつつあ」ったことが挙げられている（同前）。

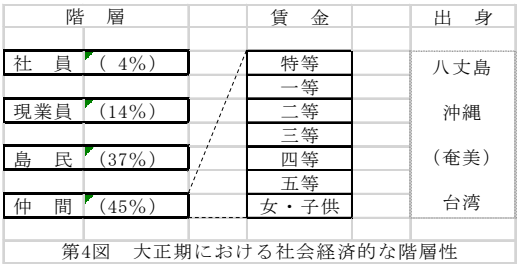
（2）移入労働者の特徴

第 4 表は、大正 15（1926）年における戸主の社会的属性別人口を示している。南大東の住民は明確に階層化されており、東洋製糖の社員を頂点に、小作人（親方とも呼ばれた）であるところの島民が全人口の約 37%を占め、最下層に「仲間」が位置している（第 4 図）。

第4表　戸主の社会的属性別人口（1926年5月）

属　性	戸数	男	女	計
官　吏	6	11	10	21
社 員	47	84	70	154
現業員	148	297	247	544
会社直属仲間	165	317	125	442
島　民	319	733	768	1,501
島民使役仲間	197	982	371	1,353
合　計	882	2,424	1,591	4,015

『大東島誌』（240頁）より作成。



第4図　大正期における社会経済的な階層性

『大東島誌』では、「本島に於ける現在労働者の主なるものは沖縄本島より移住せるもの」としたうえで、移住労働者を以下のように分類する。すなわち、①「財を得て帰郷する者」、②「志半にして病を得、鬼籍に入る者」、③「志を抱いて内地各方面に渡航するもの」、④「業を更（か）へ北島に渡航するもの」、⑤「相当の貯蓄を得〔、〕小作権の譲渡を受け耕作者となるもの」、そして⑥「会社の使用人となり沖縄本島より渡航せる労働者を指導しつつあるもの」という、6 つの類型である。

⑤・⑥は階層上向の可能性があったことを示している。実際、「募集に応じ渡来したる者の内には勤勉努力の效を積むで相当の蓄財を為し契約期間満了後小作権の譲渡を受けて耕作者となるものが可なりある」（185 頁）といい、当時の小作人 250 名のうち 112 人までもが「仲間」として移入した者たちであった。小作人の 45%が「小作権の譲渡を受け」ていた者たちということになる。玉置商会時代には「『会社員・八丈島出身・出稼ぎ労働者』という『身分社会』が意図的に形成されていた」[16] というのだが、小作人に関してはのちに草分けの八丈島出身者から沖

縄出身の移住労働者へと、その主軸は移っていた。

とはいえ、「大方は単に一時的出稼人の気分で辛苦成功を為さんとする者」は少ないとされ、実際には期間を定めた一時的滞在者が多かったようだ。仲間の契約期間は通常 1 年ないし 2 年で、また時期に応じては半年もあった。沖縄の県史・市町村史・字誌の多くに「移民・出稼ぎ」編や項目が立てられるものの、大東諸島に関しては（八重山とは異なり）「移民」として語られることがほとんどないのは、そのためである。

また『具志川市史』によると、「具志川村の人々にとって大東島への出稼ぎは他に移民するため、特に南洋群島に移民するための旅費稼ぎであった」[17] とされるように、のちに海外へと展開する③のありようも、まさに「出稼ぎの島」としての大東諸島を物語っている。

第5表　出身道府県別人口（1926年5月）

道府県	男	女	計
沖　縄	1,781	943	2,724
東　京	493	531	1,024
鹿児島	20	22	42
静　岡	20	19	39
熊　本	10	13	23
その他	100	63	163
合　計	2,424	1,591	4,015

『大東島誌』（240頁）より作成。

第 5 表は大正 15（1926）年 5 月時点の出身道府県別人口をまとめたものである。全人口の約 68%を沖縄出身者が占め、八丈島を中心とする東京出身者が約 26%でつづく。

その他に一括したが、北海道（2）、青森（4）、宮城（8）、福島（6）、茨城（9）、栃木（8）、埼玉（1）、千葉（6）、神奈川（3）、富山（11）、長野（6）、愛知（8）、滋賀（1）、大阪（4）、和歌山（13）、島根（3）、岡山（5）、広島（8）、香川（3）、愛媛（7）、高知（2）、福岡（20）、佐賀（10）、長崎（12）、大分（3）からの移入もみられた。

残念ながら、戦前については沖縄のどの地域から移入したかまではわからないものの、「労働供給地として沖縄本島に於ては当大東島を小布哇と称する様になつた」（180 頁）とされていることから、送り出し地域はひろく分布していたものと考えられる。

(3) 企業統治下の暮らし

> 就業時間後は各自与へられたる宿舎に於て蛇味線を弾くものあり、夫婦者に在りては養豚養鶏養兎を為すものあり、養豚、養鶏、養兎甘藷を併用するもの多し。生活費は大方一家十五円乃至二十五円位なり。独身者一日の食費は二十七銭の規定にして、主食物は外米なれ共時に甘藷を使用することあり。小使其の他として普通一ケ月大略四五円位消費す。（184 頁）

これは『大東島誌』に掲載された「仲間」の「生活状況」に関する記述である。

「仲間」の衣食住についてみるとき、住に関しては東洋製糖の「平家棕梠葉葺」（12棟）・「石造平家」（2棟）が用意されていた一方、小作人に対しては独身の「仲間」を収容できる施設はもちろんのこと、夫婦で来島している「仲間」に関しては耕地面積に応じた宿舎（棟）数を定めていた。当時、夫婦仲間は全体の約2割であったという。「食費は凡て本人の負擔とし月末賃金計算の際一日二十七銭の割合にて控除」されていた（187頁）。衣類などは「自弁」であり、必要に応じて（余裕のある場合は）「適宜購入」していた。

> 経営十年実に無人の境より海上の楽園に改変され桑滄〔滄桑〕の變も斯くやと想はるゝ位である。（237頁）

> 凡そ一会社が全島を領有するが如きは稀有の事例にして当社は確実に且つ完全に南北大東島の所有権を握れり。政府も又充分なる理解を以て毫（すこし）も干渉せざるのみならず、拓殖上幾多の便宜を与へ、島民も又悦服協力し、全島和気靄然として聊かも他より制肘（せいちゅう）さるゝ事なく、其の経営は当社の自由手腕に一任せるを以て能く一貫したる施設をなすを得、斯の一事は我国に於て他に比すべきものなく、特異の事実にして植民地経営上最も貴重なる参考資料なる可し。[18]

しかしながら、移動、学問、趣味、そして自家栽培などの自由はなく、つねに監視下におかれて格付けされた。それは、賃金の格差に明示されている。また、独自の紙幣（兌換券）を用いることで、消費も管理されていた。

明治42年に移住した前述のN氏は、東洋製糖の進出に関して、次のように回想していた。

> そこで土地問題が争われ、移住民は共進会をつくって代表を沖縄県庁に送って土地の権利を主張して嘆願書を出しましたが南大東の土地については熊本の大林区署でなくてはダメだといわれました。さらに陳情したが、すでに権限は移ってしまっていたのでどうにもならなかった。
>
> その後、大日本製糖に代わり、自作農は小作農へ転落して忍従の生活を続けねばならなかった。第一次大戦余波や南洋開発ブームとなり、若い者は南洋へ出向いてしまい、島は労務不足で困難を来たした。夫婦二人で耕す分だけ残してあとは取り上げるし、子どもを進学させると畑を取り上げる始末で、貧しさに泣いたものです。あの頃は全く格子なき牢獄でした。家が台風でやられると、会社から借金をして再建しましたが、返済するのに十年はかかる状態でした。[19]

東洋製糖が大日本製糖に吸収されても状況は変わらなかった。否、島は「格子なき牢獄」と感じられるほどの管理空間と化していたのである。耕地面積の削減（脅

迫)、納税や強制的な島外退去といった生殺与奪の権力を一企業が揮うという、法的保護の埒外にある例外空間が、独占企業統治下の南大東に出来していたのだ。

Ⅳ 〈孤島-都市〉の地理学

(1) 企業城下町としての在所

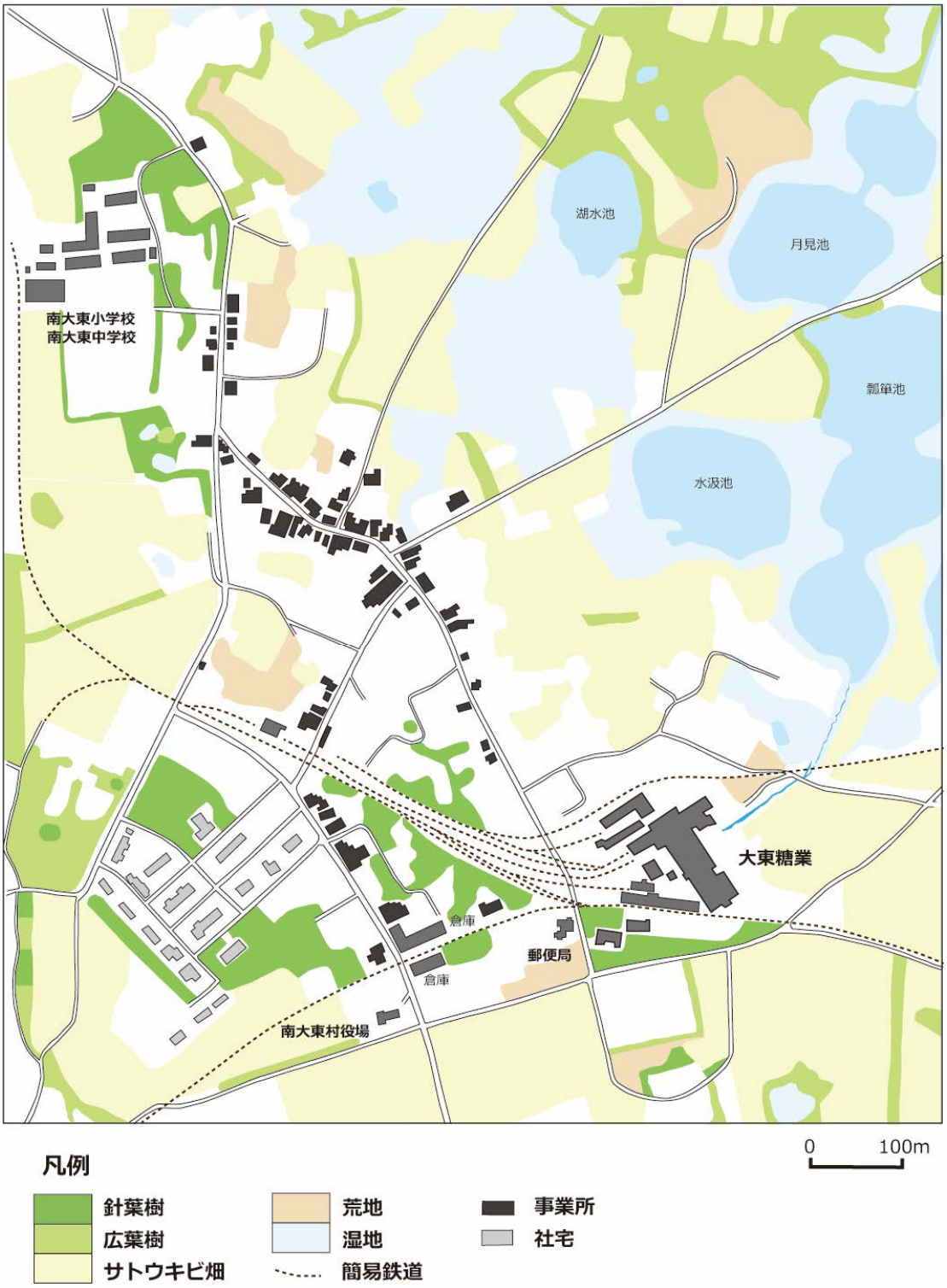
> 広いサトウキビ畑、縦横に伸びる鉄道とそこを走るサトウキビ運搬用のトロッコ、畑の中にひときわ大きく目立つ屋根を持つ工場とそびえ立つ高い煙突。その周辺には木蔭の下、碁盤目状に整備された道路とそれに沿った並木に囲われ、きちんと整い並び建つ平家の木造社宅群。現在の都市住宅と比べるとまるで田園都市のように余裕を持って建てられている。さらに、広いバスケットボールコートやプール等の共用施設、また工場でつくられる甘いアイスクリームを売る売店等々、製糖工場の風景は、南台湾で生活したことのある多くの台湾の人たちにとって忘れがたい故郷のイメージの一つとなっている。[20)]

このような「製糖工場の風景」が東洋製糖の工場設置によって、南大東島の在所にも出現する。辻原万規彦・今村仁美は、「社宅街の範囲と島の中心である在所集落の範囲はほとんど重なっており、道路、水路、橋梁などのインフラの整備をはじめ、測候所、神社や寺の建設も会社によった」とし、昭和10年代後半の製糖所と社宅街を精密地図として復原した[21)]。

第5図は、昭和49(1974)年測量の1万分の1地形図「南大東村全図」を基図として、南大東島の中心市街地にして企業城下町ともいうべき在所の土地利用を復原したものである。製糖工場から西へ延びる線路の南西にひろがる矩形の街区が、戦前からの社宅街であった。針葉樹(主としてリュウキュウマツ)や広葉樹が面的に、またところによっては列状に植栽されていることは、この地区の計画的な開発を物語る。現在は社宅の立て替えが進んでいるものの。戦後に建設されたとおぼしき長屋もいまだに住まわれている。

工場とは対蹠的に配置されているのが小中学校で、図の範囲外となるが、そのさらに北に大東神社が位置している。

周辺に目を向けると、市街地を囲繞するかのように、さとうきび畑が分布している。北西部には大小の池と湿地帯からなるラグーンの景観をみることもできる。隆起環礁内の盆地でさとうきび畑とラグーンに囲まれる都市景観は、世界にも類例がないであろう。



第 5 図　在所周辺の土地利用（1974 年）

注目すべきは、線路の北に大小の建築物が密集して、小さいながらも市街地の形成されていることである。道路は蛇行しており、必ずしも計画的に開発されたわけではないようだ。土地区画も整理されているわけではなく、建物の向きからすれ

ば、スプロールに近い空間形態といってよいだろう。辻原と今村が「社宅街の範囲と島の中心である在所集落の範囲はほとんど重なって」いると指摘するところをみると、この市街地は戦後に形成された、つまり大東糖業の操業によって成立した可能性が高い。

（2）人口移動からみた南大東島

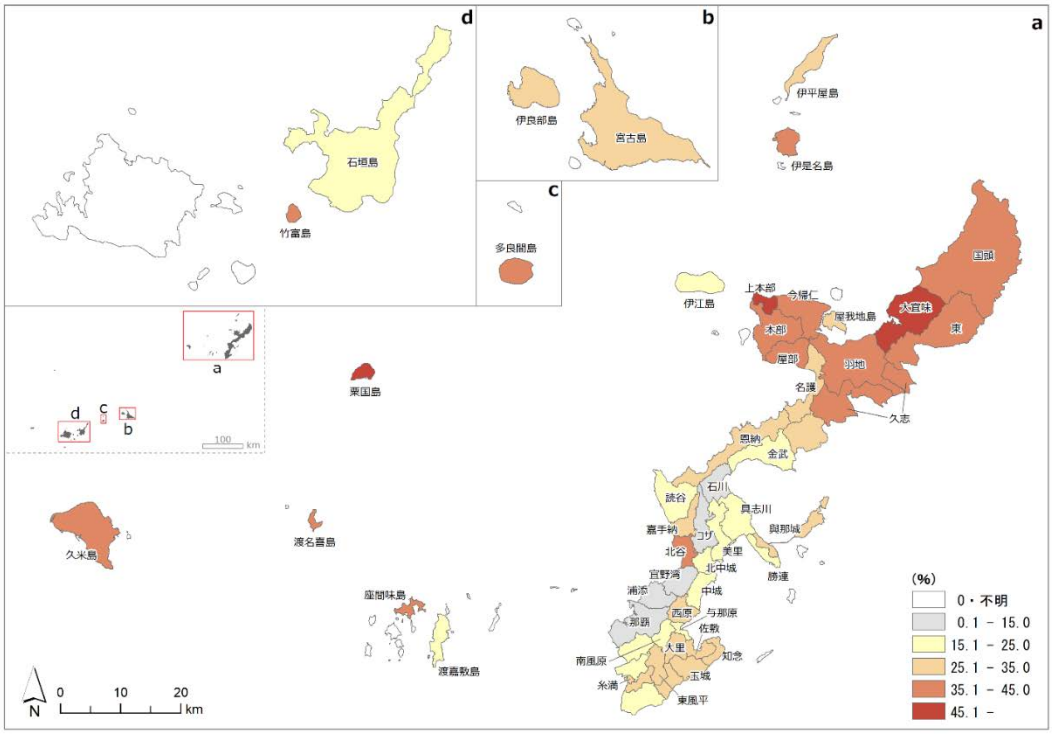
すでにみたように、大正 15（1926）年の出身地別人口では、約 68%を沖縄出身者が、次いで約 26%を東京（おもに八丈島）出身者が占めていた。南大東村編『南大東村勢要覧 1959 年』に収録された「非本籍人出身地別調査（臨時戸籍及び寄留簿登載者）」によると、本籍のある人口 267 名、「本籍人以外の琉球人」2,771 名、そして「琉球に籍のない者」337 名であった。南大東に本籍のある島民を除いた沖縄出身者は、約 82%にのぼる。米軍統治下、域外への移動が制限されるなかで、琉球諸島からの移入が増えていたわけだ。

では、彼ら彼女らは琉球諸島のどこから来ていたのであろうか。ここでは、米軍統治下における南大東島人口の出身地を琉球政府計画局統計庁『1960 年 国勢調査報告 人口編 第 2 巻 市町村編』の分析を通じて明らかにしてみたい。沖縄島をのぞく島嶼に関しては、市町村名ではなく島名で表記することとする。たとえば、久米島は具志川と仲里の二村からなるが、島で一括した。

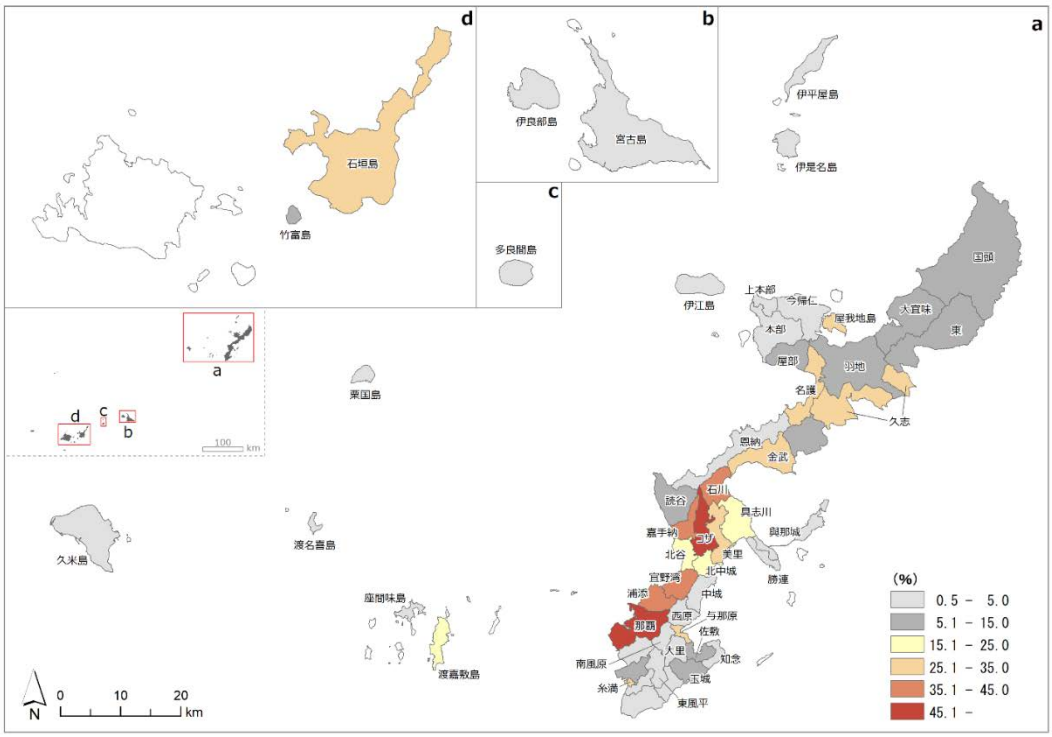
具体的な検討に入る前に、市町村（島）別の流出人口と流入人口の割合を地図化した第 6 図・第 7 図から、人口移動の空間構造を俯瞰しておこう。各市町村の人口に占める流出人口の割合に関して第 6 図から明らかとなるのは、米軍統治下の琉球における空間的な周縁性である。

すなわち沖縄島では、国頭（くにがみ）-中頭（なかがみ）-島尻（しまじり）と区分される島内のうち、ときに山原（やんばる）とも称される国頭の割合が高いのだ。大宜味は人口の半分以上（約 56%）、上本部は人口の半数弱（約 48%）が他市町村で居住していた。島尻の東部にも 25%を超える町村が連接して面的なひろがりをみせている。離島も総じて高い。

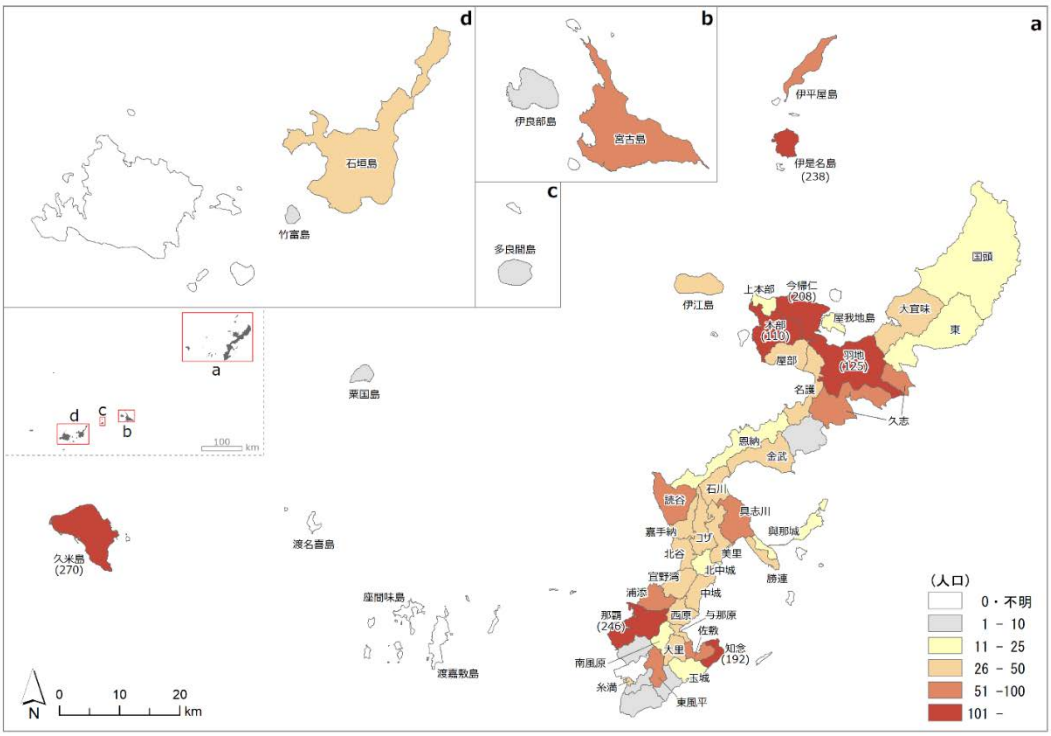
他方、中部から南部にかけては、たすきをかけたように 15%以下の市町村が帯状に分布する。この点は、第 7 図とあわせてみると、よりわかりやすくなる。同図は域外からの流入人口の割合を階級別に示したもので、人口集中の度合いをみてとることができる。35%を超える高い流入率の市町村が、第 6 図と同様、帯状に連担する。これは首都たる那覇から軍道 1 号線に沿って、キャンプ・キンザー、普天間基地へといたり、さらには嘉手納基地を経由してキャンプ・ハンセンの所在する金武へと連担する都市化（コナベーション）を意味している。つまり、中心-周辺関係が空間的に構造化されている様態を反映しているものとみてよい。



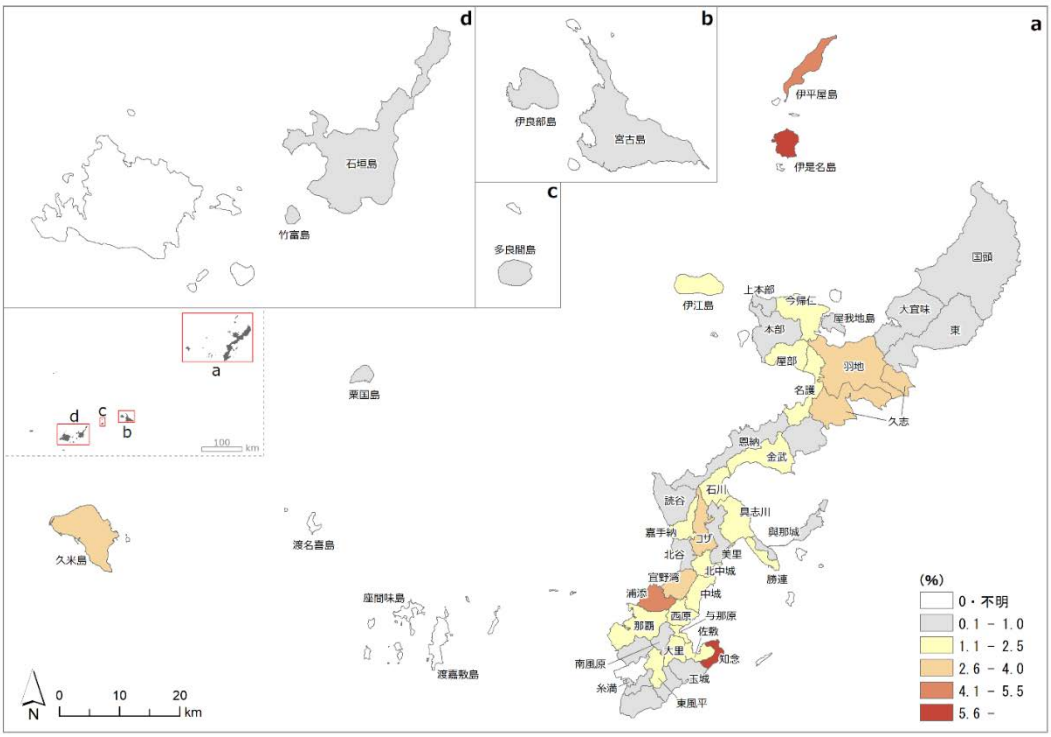
第 6 図 他地域居住人口の割合



第 7 図 非本籍地人口の割合



第 8 図　南大東島人口の出身地分布（1960 年）



第 9 図　人口流出地域における南大東移住者の割合（1960 年）

なお、北はコザ・嘉手納と、同じく南は宜野湾と接する北谷で域外への流出人口が多く、流入人口の少ないのは、村域の土地の大半を基地に接収された結果、居住可能域の余地が残されていなかったからである。

以上の点をふまえて、南大東人口の琉球諸島における出身地を階級区分して示した第 8 図を観察する。100 人以上については絶対数を図中に補記した。これによると、最大の送り出し地域は久米島で、270 人にのぼる。次いで那覇（246 人）、伊是名島（238 人）、今帰仁（208 人）、そして知念（192 人）とつづく。宮古列島も、合計すれば本部を上回る 111 人となるので、けっして小さい規模ではない。

首都の那覇はともかく、久米島と伊是名島の規模は特筆に値する。東シナ海の離島から、主島たる沖縄島をこえて太平洋の離島へと向かう、離島–離島間の大規模な人口移動が起こっていたのだ。

沖縄島についても、はっきりとした特色が見いだされる。すなわち、国頭と島尻とに上位地域が分布しており、さらに国頭のなかでも本部半島から東部の羽地村・久志村にかけて集中していることがわかる。島尻に目を移すと、那覇と知念で突出しているが、糸満周辺の値は総じて低い。知念が多いのは、大東航路を有する馬天港（佐敷）に近いことも誘因のひとつと考えられる。中部はまんべんなくといった感はあるが、具志川は 92 人を数えた。

次いで、人口移動の絶対数を相対化するために、各市町村の域外流出人口に占める南大東島人口の割合を示したのが第 9 図である。伊是名（7.6%）と知念（7.0%）が突出しており、伊平屋（4.6%）と浦添（4.2%）とがつづく。これは、転出先となる南大東との結びつきの強さを示していると言えよう。

逆に、宮古列島の 111 人はわずか 0.2%、同じく本部の 110 人は 0.9%にとどまる。人口流出の激しかったこの二つの地域において、南大東島のプレゼンスはさほど高くなかったことになる。

(3) 孤島の消費空間

在所の市街地はどのように形成され、いかなる事業所が立地していたのであろうか。まず、南大東村編『南大東村勢要覧 1959 年』に書き上げられた、在所の「業態別」戸数を参照してみたい[22)]。

農業 66、分蜜糖工場 1、農信協同組合 1、歯科医介輔 1、助産婦 2、漁業 8、雑貨商 11、鍛冶業 2、売薬業 3、荷□製作業 1、建築業 3、洗濯及貸本業 1、左官業 1、風呂屋業 1、美容業 2、和服仕立業 1、家具大工 2、製菓業 3、酒造業 2、食肉販売業 5、豆腐製造小売 5、コンニャク製造小売 1、時計修理業 1、靴修理業 1、蹄鉄業 1、遊戯場 1、映画館 1、娯楽場 1、飲食店 10、料亭業 7

職人を中心とする製造業（鍛冶、荷□製作、建築、和服仕立、家具大工、製菓、酒造、時計修理、靴修理、蹄鉄）、食品の製造販売業（食肉、豆腐、コンニャク）、

そして小売業（雑貨商、薬）、さらにはサーヴィス業（洗濯・貸本、風呂、美容、遊戯場、映画館、娯楽場、飲食店、料亭）と、主島から 300 キロメートル以上離れた〈孤島〉の中心市街地としては、じつに充実した構成となっている。映画館に遊戯場・娯楽場、さらには飲食店だけでなく料亭までもが 7 軒もある。

村勢要覧と同年発行の『沖縄商工名鑑（1959 年版）』に掲載された情報をもとに[23]、事業所の一覧表と立地を示す地図を作成した（第 6 表・第 10 図）。

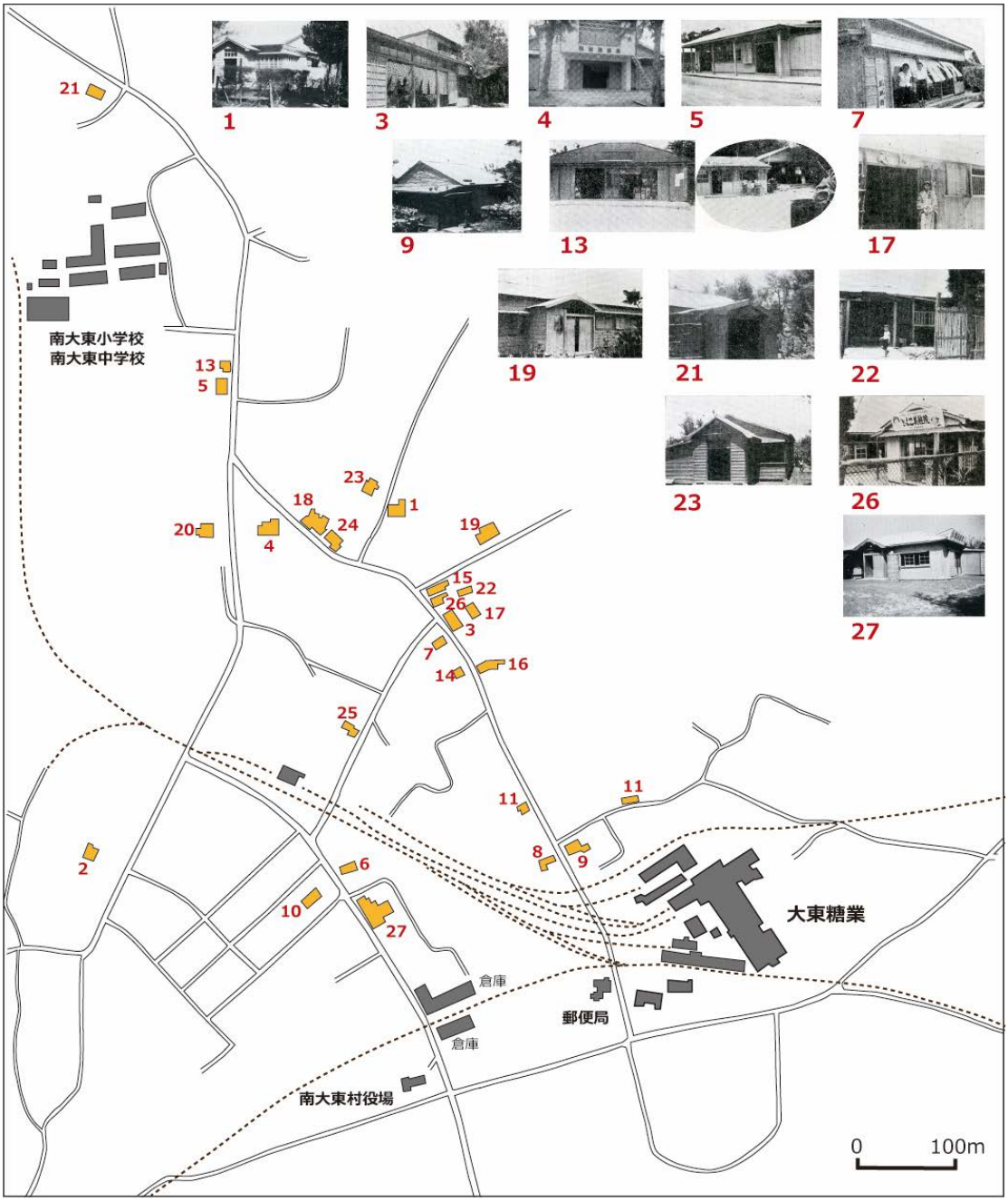
「～商店」は、「日用雑貨・食料品・衣料品・医薬品・化粧品」などを販売する「雑貨商」である。なかには、「冷しコーヒー・氷・冷し物一切」を扱う店舗もあった（3・7）。「淺沼商店」（27）の経営者は、「初期開拓の先駆者」と位置づけられる父が明治 41（1908）年に来島し、本人は昭和 4（1929）年に生まれているので、さとうきび農業と兼業していたか、商業に転業したものと思われる。また、泡盛も醸造されていたことがわかる（9・12）。

なによりも注目されるのは、「明るくサービスのよい御清遊に大小お宴会は是非」、「大東の思い出に南栄楼へ・・・明るく静かなお座敷 大小お宴会は是非」、「腕自慢のコック 美人のサービス」、「大東の情緒で・・・ 料理もうまい・・・」、「御清遊に是非一度!! ＝大東名物＝」などと宣伝される、料亭の存在である。「大東の思い出／大東の情緒／大東名物」という文言は、定住者に対してではなく、季節労働者に向けた宣伝であることをはっきりと示している。

第 6 表 南大東島の事業所一覧

№.	名　称	出身地		№.	名　称	出身地
1	歯科介輔診療所			15	喜久盛商店	
2	南大東診療所			16	末吉商店	
3	渡口商店			17	料亭 入船	知念村
4	大東映画館	（八丈島）		18	料亭 亀の家	伊江島
5	沖山商店	（八丈島）		19	料亭 南栄楼	本部町
6	南大東販売店	那覇市真和志		20	料亭 姫松	
7	新垣商店	伊是名村		21	料亭 みなみ	
8	恩納三次郎商店	伊是名村		22	料亭 鶴の家	
9	新垣酒造所	知念村		23	料亭 福の家	知念村久高島
10	星野商店	（八丈島）		24	あづま理髪館	伊江村
11	金城商店	本部町		25	沢岻製菓所	
12	大東農協酒蔵所			26	きよこ美粧院	
13	奥山商店	（八丈島）		27	淺沼商店	（八丈島）
14	西浜商店			28	与儀商店	

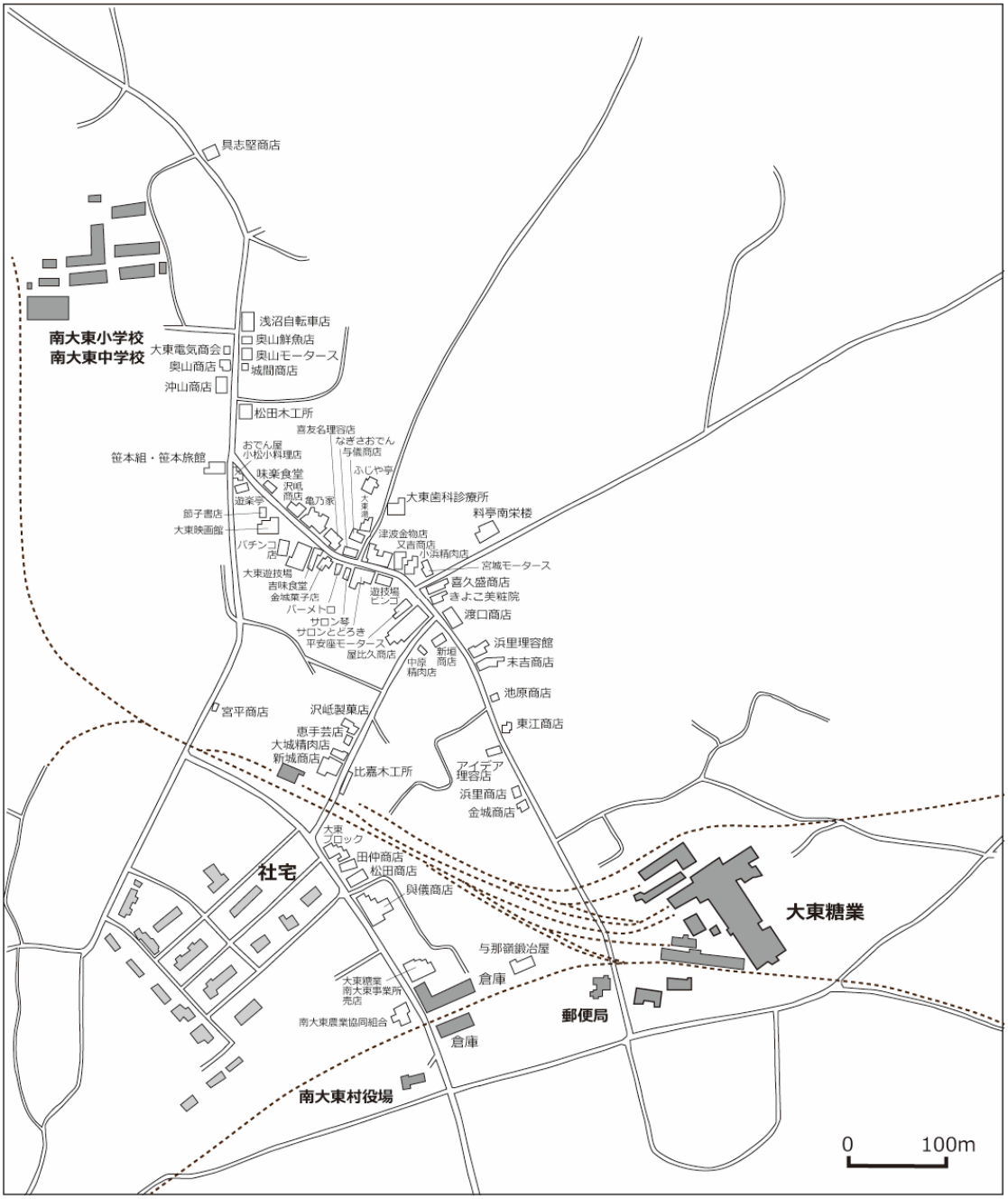
№.の□表記は写真のあるものを示す。



第 10 図 在所における事業所の立地（1959 年）

また、商業者の出身地は伊是名島（2 名）・伊江島（2 名）・久高島（1 名）と、離島にも分布していた。

次いで、沖縄県公文書館の所蔵する『事業所基本調査調査票』（1970 年）をもちいて、昭和 45（1970）年の在所の景観を復原する。この資料には、琉球政府企画局統計庁が実施した「事業所基本調査」の「調査区要図」と「調査対象名簿」とが含まれる。



第 11 図 在所における事業所の立地（1970 年）

手書きの地図である「調査区要図」には、事業所の位置を示す番号が書き込まれており、それらは「調査対象名簿」に記載された番号と符合するので、各事業所の立地をある程度まで把握することができる。「調査対象名簿」には、事業所名、事業主名、所在地、事業の種類、経営組織、本所・支所の別、常用雇用者数などが記されている。現地での聞き取り調査をふまえて事業所の立地を特定したのが、第 11 図である。

商店（雑貨・食料品）20 軒、料亭を含む飲食店 13 軒、食品の専門店（鮮魚・精肉）4 軒、美容・理容店 4 軒、娯楽サーヴィス（映画館・遊技場など）4 軒など、計 67 の事業所が立地していた。

> 島の娯楽施設は、大東映画館とバー「桜坂」ぐらい。ほかに、〝若くない女性〟が蛇皮線をひきながら「ラバウル小唄」など歌うベニヤ板壁、アンペラ敷の殺風景な〝料亭〟が三軒あるが、これは製糖期の季節労働者が主な客らしい。[24)]

これは、昭和 40（1965）年の雑誌記事から引用したものであるが、料亭は昭和 34 年と比べるとたしかに減少したものの、やはり「製糖期の季節労働者」を主たる客としていたことがわかる。

その他、業種は多岐にわたり、物販のみならずサーヴィス業も伸長したことで、小規模ながらも都市的な様相を呈していることがうかがわれる。さとうきび・製糖モノカルチャー経済ならびに流動性の高い人口によって、南大東は孤島でありながら、都市的なる空間となっていたのであった。

V　おわりに

本研究は、太平洋の孤島である南大東島が、20 世紀初頭の植民地プランテーションにはじまり、さとうきび農業・製糖モノカルチャー経済を基盤として、移住と季節労働者の移入、さらには市街地形成を通じて都市化する様態を、歴史地理学的な観点から明らかにした。とくに、移民（移住労働者）に関しては、琉球政府が実施した国勢調査ならびに関連する資料にもとづいて、出身地別の移入状況を地図化したことで、南大東島と東シナ海に位置する離島との結びつきを浮き彫りにすることができた。

米軍統治下の沖縄では、景観を復原するに足る地図が作製されることはなかった。那覇やコザをはじめとする沖縄島の比較的人口規模の大きいところでは市街地の状況を把握することのできる地図が存在するものの、南大東をはじめとする離島では事業所がどのように立地したのかを知ることは難しい。本研究では、復帰後の地図をベースマップとしつつ、関連資料と聞き取り調査から都市的施設の立地を特定することで、1959 年と 1970 年の市街地図を作成し、景観観察を行なった。とくに料亭の立地を復原できたことは、季節性の高い農業労働と余暇を考える上で基礎的な情報となり、〈孤島-都市〉の一面に光を当てることができたと思われる。

しかしながら、季節労働者に関しては、労働の実際、宿泊の状況、余暇の過ごし

方などを明らかにするにはいたらなかった。とくに日中国交正常化（1972 年）までは台湾から、1973 年以降の 4 期は韓国から、いずれも女性の労働者が雇用されて各農家に泊まり込んで刈り取りの作業にあたっている。政治情勢ともかかわる農業労働力の確保問題、そして労働者の生活実態については、今後の課題としなければならない。

［謝辞］
本研究は、公益財団法人 JFE21 世紀財団による 2019 年度アジア歴史研究助成を受けてなされたものです。末筆ながら、財団の支援に謝意を表します。COVID-19 の感染拡大にともない、調査がままならないなか、研究期間の延長を許可していただことにも、重ねて御礼申し上げます。

注記

1）柳田国男「南島研究の現状」(『柳田國男全集 第四巻』筑摩書房、1998 年、78-99 頁）など。
2）以下の記述は、山口恵一郎編集者代表『日本図誌大系 九州Ⅱ（普及版)』(朝倉書店、2011 年、407-409 頁）にもとづいている。
3）平岡昭利『アホウドリと「帝国」日本の拡大 南洋の島々への進出から侵略へ』明石書店、2012 年。
4）塩谷誠編『日糖六十五年史』大日本製糖株式会社、1960 年、99-105 頁。
5）以下の記述は、南大東村役場「開拓農地の所有権問題を省みる 資料編」(『土地所有権確立 30 周年記念』南大東村役場、1994 年、98-99 頁）ならびに南大東村役所『開拓 70 周年記念 南大東島のあゆみ』南大東村役所、1970 年、1-4 頁）にもとづいている。
6）江崎龍雄編『大東島誌』江崎龍雄、1929 年、179 頁。
7)『オキナワグラフ』1970 年 4 月号、12-13 頁。
8)『沖縄タイムス』1959 年 11 月 29 日。
9）志賀冨士男編『志賀重昂全集 第六巻』志賀重昂全集刊行会、1928 年、14 頁。1995 年に日本図書センターから発行された復刻版を参照した。
10）前掲、志賀冨士男編『志賀重昂全集 第六巻』、14 頁。
11）以下の記述は注記しないかぎり、前掲の江崎龍雄編『大東島誌』による。
12）西原雄次郎編『日糖最近二十五年史』大日本製糖株式会社、1934 年、150 頁。
13）前掲、西原雄次郎編『日糖最近二十五年史』、1934 年、153-155 頁。かぶと新報社編『諸会社之解剖 甲編』かぶと新報社事務所、1917 年、107-110 頁。
14）今泊誌編集委員会編『今泊誌』今帰仁村字今泊公民館、1994 年、500 頁。
15）辺野古区編纂委員会編『邊野古誌』辺野古区事務所、1998 年、515 頁。

16) 浦添市移民史編集委員会編『浦添市移民史 本編』浦添市教育委員会、2015 年、433 頁。
17) 具志川市史編さん委員会編「南北大東島への出稼ぎ」(『具志川市史 第 4 巻[1] 移民・出稼ぎ 論考編』具志川市教育委員会、2002 年)、953-981 頁。引用は 955 頁。
18) 前掲、西原雄次郎編『日糖最近二十五年史』、167-168 頁。
19)『オキナワグラフ』1970 年 4 月号、12-13 頁。
20) 郭中端「台湾糖業社宅群／台湾、花蓮」(片木篤ほか編『近代日本の郊外住宅地』鹿島出版会、2000 年)、319-332 頁。引用は 320 頁より。
21) 辻原万規彦・今村仁美「戦前期の沖縄における製糖工場とその建設が地域に与えた影響」(『日本建築学会計画系論文集』第 82 巻第 737 号、2017 年)、1859-1869 頁。引用は 1867 頁より。
22) 南大東村編『南大東村勢要覧 1959 年』南大東村 (沖縄県立図書館所蔵)。
23) 大宜味朝徳編『沖縄商工名鑑 (1959 年版)』(沖縄興信所、1959 年)、489-510 頁。
24)『週刊朝日』昭和 40 年 8 月 20 日号。